

まつうらたんごのかみさだむ

松浦丹後守定

相浦の愛宕山にあった飯盛城の最後の城主は「松浦丹後守定」です。

父は平戸の「隆信」の三男で宗家松浦の跡目を継いだ「親」、母は武雄の塚崎の城主「後藤貴明」の女、元亀二年（一五七一）に生まれています。わずか四歳の時に父は不慮の死をとげ、跡を継ぐことになりませんが、後見役は平戸の祖父「隆信」、伯父「鎮信」でした。

天正十五年（一五八七）豊臣秀吉は薩摩の島津義久を攻めました。この戦いは九州征伐とも云われます。このとき十六歳になった定も平戸の鎮信旗下の将として出兵しております。島津氏の降伏で戦いは終わり、秀吉は福岡の箱崎で九州各地の大名に所領の安堵をしております。



定の本像が安置されている大宮姫神社（竹辺町）

戦に勲功のあった鎮信に秀吉は加増を申し出しましたが、鎮信は「志佐や相神浦は攻め取った土地であり、この土地を平戸の領地の中に加えてもらい、今後永代国替なしを約束してもらえば、ほかに領地は要り

ません」と述べています。

宗家松浦の消滅と、平戸六万三千石の基礎がここに定まったのです。この時「定」は平戸が差し出した人質として大阪に上がり、泉州、堺で三年を暮らすことになりました。

九州征伐で島津氏に味方し秀吉に刃向かった武將に、筑前の秋月種実があります。戦いに敗れた種実は名物の肩衝茶入「柗柴」を秀吉に献上し赦されました。この時種実は人質として女を秀吉に差し出し、大阪に上らせております。

この人が丹後守定の妻になる人です。案外縁結びは豊臣秀吉がもしれません。秋月家は日向の国、高鍋に転封され幕末を迎えます。

秀吉が引き起こした朝鮮の役に定も平戸の鎮信と共に出征しており、文禄二年（一五九三）正月七日平壤の戦いで戦死しております。享年二十三歳でした。「春叟永芳」と諡され相浦の金照寺に葬られております。

定には一人の子供があり、名を「信正」と云い平戸で養育されました。信正の子「信貞」のときに家の再興が許され、今福に一五〇〇石を分知されます。江戸に出て旗本となり、江戸にあって代々幕府の役職を務めております。 記・澤 正明